

江戸前の海 学びの環づくり 瓦版 第20号

著者	河野 博, 川辺 みどり
雑誌名	江戸前の海学びの環づくり瓦版
巻	20
ページ	1-2
発行年	2022-04-18
権利	Posted with approval of the Edomae Education for Sustainable Development (ESD) program of Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT).
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00002392/

2021年 東京湾岸ミュージアム懇談会
第1回/第2回 報告

東京海洋大学江戸前ESD協議会は、2021年5月から12月まで、東京湾にかかわる体験型活動プログラムを実施している4つの博物館とひとつのNPO法人のスタッフとともに、「東京湾岸ミュージアム懇談会」をオンラインで6回開催しました。今号では、第1回と第2回の概要を紹介します。

「体験型活動の悩みを共有しよう」

きっかけは、[東京湾再発見・アート×サイエンス講演会「江戸前の海と文化」](#) @東京海洋大学(2019年12月8日)を、慶應義塾大学アート・センター(以下、慶應アートセンター)と東京海洋大学江戸前ESD協議会とで共同開催したことでした。

慶應アートセンターは、現代社会における芸術活動の役割をテーマに、理論研究と実践活動を展開して

いる大学附属の研究センターです。2016年から「都市のカルチュラル・ナラティブ」(以下、カルナラ)という、地域の文化資源をどんどん紹介し、活動の参加者にその文化資源を自分自身の物語の一部として語ってもらう「物語(ナラティブ)」プロジェクトを港区のさまざまなミュージアムと連携しておこなっています。その一環として、人材育成講座をおこなっています。2018年の開始時には「カルチュラルコミュニケーター・ワークショップ」をおもに慶應義塾大学の留学生を対象におこない、2019年からは「カルナラコレッジ: 地域文化資源再発見ワークショップ」という、港区在住の方を対象とした連続講座も実施しています。自然史や歴史をもっぱらとする博物館が多い東京湾岸で、文化資源やアートの視点から湾岸地域へのアプローチをはかる、ユニークなミュージアムです。



博物海景：藤川史人監督 - 都市のカルチュラル・ナラティブ ドキュメンタリー

More from Keio University Art Center

次の動画を自動再生

写真1 慶應義塾大学アート・センターの「都市のカルチュラル・ナラティブ」事業の一環として、2019年度に「博物海景」(監督：藤川史人)という東京海洋大学マリンサイエンス・ミュージアムを舞台にしたドキュメンタリー映画を製作していただきました。本映画は <https://vimeo.com/402455496> から視聴できます。

東京海洋大学江戸前ESD協議会や東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム(MSM)は、2019年の講演会の共同開催以前から慶應アートセンターの港区や文化庁の事業に加えてもらっていました(写真1はその事業として作成したMSMの紹介ビデオです)。さらにその後も継続参加させてもらい、その中で折々に、いろいろな「博物館の悩み」について相談していました。

そこで東京湾岸の複数の博物館にお声がけをして、2020年のうちに対面で懇談会を開催しようと計画しました。しかしその年の春に始まった新型コロナ禍によって人びとの集まりは制限され、本学もほぼ社会に対して門戸を閉ざさざるを得ず、従来おこなってきた江戸前ESD協議会の「模造紙を囲みながらみんなで話し合う」という活動はかなわなくなりました。

コロナ禍の終息がみえないままに社会活動が低下して丸1年が過ぎた2021年4月30日に、私たち東京海洋大学江戸前ESD協議会は、今年度の活動の企画等をリモート会議で相談しました。その内容はホームページ上で紹介していますのでご覧ください。その企画のひとつが、「東京湾の博物館の連携」です。そこで、この懇談会をオンラインでおこなおう、という話になりました。

第1回／第2回懇談会で共有した課題

懇談会初回は「博物館のお悩み共有」ということで、まずは、慶應アートセンターが実施してきた、自分の関心事を物語として人に伝えようというカルチュラルコミュニケーション・ワークショップ(対象は主に留学生)やカルナラコレッジ(対象は港区在住・勤・学の方々)を実施していて、主催者として気になった「お悩み」を聞く会を、リモートで実施しました。実施日は2021年5月11日で、それを「東京湾岸ミュージアム懇談会 第1回」と位置づけました。参加者は、博物館関係者4名、NPO関係者1名、海洋大教員3名、同学生1名の計9名です。

そこで共有した内容はおもに、

- ・人材育成講座の終了後、どのようにすれば参加者に社会において活動を続けてもらうのか、
 - ・社会人を対象とした「学び」の設計はどうすればよいのか、
 - ・若い人に参加してもらうためには、どうすればよいのか、
 - ・プログラム実施前に予想した年齢と実際の参加者の年齢が異なる、
 - ・スタッフが少人数のため、ワークショップなどを開催できない、
- などの問題でした。

続く第2回(8月3日開催)には、前回お話しいただいた慶應アートセンター以外の、他の3つの博物館とひとつのNPOの体験型活動の内容と、その過程で明らかになった問題について共有するとともに、その問題に対してどういう解決方法があるかなどをアイデアを出し合いながら話し合いました。ここで出た問題点とは、

- ・体験型活動の背景や結果について丁寧に説明したいけれど、説明する時間を十分にとれない、
 - ・体験型活動が、その場での楽しさだけで終わっているのではないか、
 - ・体験型活動に参加した方々の意識の変化や行動の変容を把握する方法がわからない、
 - ・どうすれば体験型活動に協力していただいた方へ協力する意義を感じてもらえるか、
- などでした。

焦点を絞れなかったことの反省

こうして実施した第1回と第2回の懇談会は、和気あいあいとしたものでした。しかし、逆に言えば、緊張感に欠ける内容でもあったと反省しています。まずは懇談会の趣旨が徹底していませんでした。つまり、何気なく悩みを話し聞くのではなく、問題に対して、どうすれば解決に少しでも近づくことができるのか、という方向性が大事でしたが、そのことをきちんと共有していませんでした。

そこで、これまでに出てきた問題点を整理して分析することとし、そのために「プロジェクト・サイクル・マネジメント(PCM)」手法を適用することを提案しました。これは第3回の懇談会になりますので、改めて別の瓦版でご紹介します。

(河野博/川辺みどり)

「江戸前の海 学びの環づくり」(東京海洋大学江戸前ESD協議会)は、2006年11月に環境省「国連持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」事業に採択されたことから始まった、東京海洋大学内の任意団体です。以来、東京湾など沿岸海域の持続的利用のしくみづくりを考えるために、本学のさまざまな海洋分野の教員が、学部生/大学院生や「船の科学館」(品川区)、「大森海苔のふるさと館」(大田区)、港区芝浦港南支所などの協力を得て、湾岸地域の方々とともにいろいろなプログラムを実施しています。

東日本大震災以降は、福島県浜通り(沿岸部)の復興をめざす福島県漁業関係者の方々と共に「ふくしまの海@海洋大」プログラムなどを実施しています。

東京海洋大学江戸前ESD協議会の詳細についてはホームページをご覧ください。

<https://www2.kaiyodai.ac.jp/~hirokun/edomae/index-esd.htm>

共同代表：石丸 隆・河野 博
事務局：川辺みどり